

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

El dictador en la novela de Gabriel Garcia Marquez

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1986-06-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 榮一, Kimura, Eiichi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2231

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ガルシア＝マルケスの小説に あらわれた独裁者

木村 栄一

Alvaro Obregón は、メキシコ革命の動乱期を軍人として戦い、革命後大統領に立候補するが、その時つぎのように宣言する。

“I declare myself a candidate for the presidency of the republic, backed by my own pistols without ties with any parties nor offers of any platform. My background as a soldier of the revolution is sufficient guarantee that I know how to insure the wellbeing of the people and the happiness of the country. He who loves me follow me”⁽¹⁾ (わたしはいかなる政党ともつながりを持たず、またいかなる綱領の提案もせず、自分のピストルだけを支えに、ここに共和国大統領に立候補することを宣言する。わたしが国民の平安と国家の安寧を保証しうる人間であることは、革命軍の兵士としての経歴がなによりもよく物語っている。わたしを愛するものは、このわたしについてくるがよい。)

革命が終わったあとの、権謀術数がうずまき、暗殺、謀殺が頻々と起こる不安な情勢下にあったとはいえ、上にあげた一文が今世紀のある共和国の大統領候補者の言だと言われても、容易には信じがたい。ピストルを振りまわし、国民の平安と国家の安寧は自分が保証するから、ついてくるがよい、と叫ぶオブregonの姿はどう考えてもあまりにも幼児的である。

これがたとえば、わずかな手勢を連れてメキシコを征服した Hernán

(1) Dictatorship in Spanish America, edited with an Introduction by Hugh M. Hamill Jr., p. 41; New York, Alfred Knopf, 1965.

Cortés や、砂地に線を引き、安楽を拒みかつ危険と富を求める者は線から前に出ろと言った Francisco Pizarro のような conquistador (征服者)たち、あるいは独立戦争時代の指導者やその後に登場してきた独裁者の口から出たものなら、驚くにはあたらないが、1920年にメキシコの大統領に立候補した一将軍の言葉だというのはやはり只事ではない。

ここでラテンアメリカの歴史をふり返ってみると、メキシコ革命後の混乱によく似た状況が約一世紀前に起こっていたことに思いあたる。18世紀後半から、フランスの啓蒙思想や百科全書派の思想的影響を受け、さらにフランス革命やアメリカ合衆国の独立に刺激されて、ラテンアメリカでも独立の気運が高まった。それが19世紀に入ると独立戦争となって爆発し、20年代に現在のラテンアメリカ諸国の大半が独立してゆく。しかし、ヨーロッパの近代思想を学びとった上で独立運動を起こしたのはごく少数の知識人であり、新大陸に住む大半の人々は、それまでのスペインによる植民地支配に対して反撥と嫌悪を感じて立ち上がったにすぎない。

考えてみれば、スペインはルネサンスまでは他のヨーロッパ諸国と似たような道を歩みながらも、宗教改革以後近代思想を身につけていった他の国々とは違って、反宗教改革によって近代に通じる道を自ら閉ざし、多分に中世的なカトリック教世界を固守することになった。スペインの植民地であったラテンアメリカももちろん例外ではなく、ここでもやはり産業革命をはじめとする近代文明はもちろんのこと、近代の思想にもほとんど触れる機会がなかった。つまり、ラテンアメリカにとって植民地時代というのはタイムカプセルのようなものであり、その中で約三世紀の間眠りつづけたのである。そして、独立戦争によってようやく長い眠りから目覚めたのだが、その時ラテンアメリカの人々が選びとった政治体制が近代的な共和制だった。中世的な宗教観と思考様式の支配する世界に生きてきたラテンアメリカの人々は、歴史的なプロセスを経ず、なんの準備もないまま一足跳びに近代の政治体制をとることになった。たとえてみれば、ラテンアメリカ諸国は、心は子供（中世）のまま体だけが大人（近

代)になったようなもので、苦悩しながら試行錯誤を繰り返かえて成長してゆく思春期(近代への歩み)をついに経験しなかったのである。

独立革命後、Esteban Echevarría は、“The great thought of the revolution has not been realized. We are independent, but not free.”⁽²⁾

(革命の偉大な思想は実現されなかった。われわれは独立こそしたが、自由ではない)とのべているが、この言葉どおりラテンアメリカの人々は政治的独立を勝ちとりはしたが、自由を享受するところまで成長してはいなかった。加えて、独立以後も国内では反革命勢力の巻きかえしや治安の悪化などによって混乱が生じてきた。Tulio Halperin Donghiによれば、独立戦争以後、ラテンアメリカ諸国は武装した軍人で溢れ、暴力が日常生活の隅々まで支配するようになり、どこへ行くにも危険を覚悟しなければならなくなった。治安のよかった植民地時代をなつかしく思いだす人も少なくなかったが、もはや後もどりはできなかつたとのべている。⁽³⁾ ミリタリズムの支配するこの混乱に乗じて権力を手中におさめようという野心をいだいたのが、独立革命の指導者や軍人、反動的な保守主義者、あるいは野蛮で荒々しい地方ボスである。このような混乱が生じた原因を、エステーバン・エチェバリーアは、民衆の政治意識が低かつたせいで、自由を与えられてもそれをどう扱ってよいか分からず、自由主義憲法を発布しても、それを生かすだけの素地がなかつたためであるとしているが、Francisco Bilbaoは、植民地時代の遺産、とりわけカトリシズムに基づいたものの考え方や政治思想が、独立後に誕生した共和制と本質的に相容れないものであつたためであるとしている。Domingo Faustino Sarmiento は、アルゼンチンを例にとってブエノス・アイレスはすでに近代であつたが、地方にはまだ中世的で野蛮な気風が濃厚に残っており、革命後の混乱に乗じて Rosas に代表される中世(地方)が近代(都市)を征服

(2) Leopoldo Zea: *The Latin-American Mind*, translated by James H. Abbott and Lowell Dunham, p. 56; Univ. of Oklahoma Press, 1970.

(3) Tulio Halperin Donghi: *Historia contemporánea de América Latina*, p. 136; Madrid, Alianza Editorial S. A., 1977.

したために混乱が生じたとしている。以上のほかにも、独立戦争で、その経済が壊滅的な打撃を受けたことや、既成の身分、階級が根底から覆ってしまったこと、さらにはイギリス、フランスなどの外国の干渉などさまざまな理由が挙げられるが、⁽⁴⁾ Leopoldo Zea がエステーバン・エチェバリアーの言葉を引きながら、革命の指導者たちが犯した過ちを指摘している一文は興味深いものがある。

“To attract the people, they offered them an unlimited liberty, a liberty that was only possible through education; but there was no time to argue if the opportune moment had arrived. The important thing was to act. “They needed the people...they gave them unlimited sovereignty.” This was nothing but a “necessity of the times.” “It was necessary to attract the votes and the strength of the multitudes to the new cause by offering them the bait of omnipotent sovereignty.” But this right, given to a people not educated to enjoy it, would soon cause disasters which would allow negative forces to regain power and implant tyrannies. Liberty without education could only bring anarchy.”⁽⁵⁾ (彼ら(独立革命の指導者たち)は、民衆をひきつけるために、無制限の自由を与えようとしたが、自由というのは教育を通じてはじめて可能なものになる。たしかに自由を与える好機が訪れはしたが、それについて議論を戦わせるだけの時間がなかった。“彼ら(独立革命の指導者たち)は民衆を必要としており……民衆に無制限の主権を与えた”。これは“時代の要求”にほかならなかった。“全能の主権を好餌として差し出すことによって、民衆の票と力を新しい大義のほうに引きつける必要があったのだ。”しかし、それを享受すべく教育されていない民衆にこのような権利を与えてしまえば、それがもとでやがて数々の災厄が起り、反対勢力が権力を取り取り戻して、専制

(4) *The Latin-American Mind*, p. 44~67.

(5) *Idem.*, p. 62.

政治を敷くようになるだろう。教育をせずに自由を与えれば、そこから生まれてくるのは無政府状態だけであろう。)

選挙制度の違いや個々の国の置かれた状況を考えると、軽々しい比較は許されないが、維新後の日本でもやはり選挙が重要な問題になったことは、司馬遼太郎の次の記述からも明らかなおりである。

「大久保にすれば、ヨーロッパにあっては文明がふるく教育が普及し人智がひらけている。さればこそ人民が選挙を通じて執政官をえらぶということも可能であろうが、日本にあっては百姓町人にそういう素養がなく、まして不平士族にそういう権利をあたえれば国家は千々に破壊されてしまうにちがいない。すべてはるかな将来のことであり、それにいたるまでは官の専制独裁によらねばならない、としている。

ちなみに旧幕臣の勝海舟はその海外知識の豊富さと政治の古強者ということで維新後も明治政権に対する助言者でありつづけたが、このことにつき大久保から相談をうけたことがあったのであろう。そのとき勝ですら、

「明治も三十年を越えてからのことだよ」

と言い、大久保も承知したらしい。ところが後年、自由民権運動がおこり、歴代の政府がてこずり、ついに明治二十二年、憲法が發布され、つづいて二十三年、衆議院選挙がおこなわれた。この前後、勝は伊藤博文に会うことがあり、その席上、ほとんど罵倒せんばかりのいきおいで、「おまえさんがたはどこまでうぬぼれているのさ」といった。うぬぼれている、とはいまの段階の日本人に選挙権をわたしてしまつて議会をひらかせてしまえばどうにも收拾がつかない、国政は運営できない、それをおさえてゆけるとおまえさんがたはうぬぼれているのか、という意味である。勝は旧幕時代からアメリカ合衆国の政治運営のやりかたを一種の理想としてきた。が、日本の百姓町人や不平士族には合衆国の人民ほどの政治意識はないからまだまだむりだとなえつづけてきたのである。⁽⁶⁾

(6) 司馬遼太郎『歳月』、司馬遼太郎全集第二十三巻所収、p. 248-249。文藝春秋、昭和56年。

レオポルド・セアと司馬遼太郎の描きだしている状況を読み比べてみると、改めて混乱期の政治のむずかしさを教えられる思いがするが、それはともかく、明治維新後「官の専制独裁」によらざるをえないとした明治時代の政府と異なり、ラテンアメリカ諸国の指導者は、さまざまな事情があったとはいえ、まだじゅうぶんに政治意識の発達していない民衆に選挙権を与えてしまったために、いたずらに混乱を招くことになった。かくして、独立戦争によって既成の秩序を崩壊させたラテンアメリカの人々のまえに現れてきたのは、收拾しがたい混乱と無秩序であった。加えて、長年にわたって植民地支配を受けてきたために国家意識はきわめて希薄で、民族意識も、スペイン人を中心とする白人やインディオ、黒人、さらには大多数を占める混血などによって人口が構成されているために、その形成はきわめて困難であった。一度破壊したものはもとに戻すことはできない、それと同じで植民地時代の秩序と安定はもはやもどってはこない。しかも、目の前にあるのは暴力が支配する混沌でしかなかった。近代的な国家意識もなければ、民族意識もまだ形成されていない段階で、そうした現実をまえにして、混沌に秩序をもたらされた神を信仰してきたカトリック教徒のラテンアメリカの人々が、神にかわって自分たちの目の前の混沌に秩序をもたらす強力な指導者を求めるようになったのも無理からぬことであった。しかし、暴力による権力奪取はけっきょく新たな暴力を生み出すだけあり、これが悪循環となってラテンアメリカ諸国でつぎつぎに独裁者が生まれてくることになるのだが、その点については例えばつぎの Gabriel García Márquez と Plinio Apuleyo Mendoza の対話からも明らかだろう。

—Y las treinta y dos guerras perdidas del coronel pueden expresar nuestras frustraciones políticas. ¿Qué hubiese ocurrido, a propósito, si el coronel Aureliano Buendía hubiese triunfado?

—Se habría parecido enormemente al patriarca. En un momento dado, escribiendo la novela, tuve la tentación de que el coronel se tomara el poder. De haber sido así, en vez de *Cien años de soledad*

habría escrito *El otoño del patriarca*.

—¿Debemos creer que, por una fatalidad de nuestro destino histórico, quien lucha contra el despotismo corre gran riesgo de volverse él mismo un déspota al llegar al poder?

—*En cien años...*, un condenado a muerte le dice al coronel Aureliano Buendía: «Lo que me preocupa es que de tanto odiar a los militares, de tanto combatirlos, de tanto pensar en ellos, has terminado por ser igual a ellos.» Y concluyó: «A este paso, serás el dictador más despótico y sanguinario de nuestra historia.»⁽⁷⁾

(メンドサ「大佐(『百年の孤独』の登場人アウレリアーノ・ブエンディアー大佐)が三十二度の戦闘にことごとく敗れたというのは、われわれの政治的挫折を象徴しているのかもしれないね。ところで、万がいちアウレリアーノ・ブエンディアー大佐が勝利をおさめていたら、どうなっていたらう。]

ガルシア＝マルケス「族長にそっくりの人間になっていただろうな。あの小説を書いているときにふと、大佐に権力をとらせてやりたいという気持ちに襲われたことがあるんだが、そうしていたらきっと『百年の孤独』ではなく、『族長の秋』を書いたらうな。」

メンドサ「われわれの歴史的運命がもたらす宿命によって、専制主義を相手にたたかう人間は、権力の座につくとその当人が専制君主になる危険にさらされていると考えなくてはならないようだね。」

ガルシア＝マルケス「『百年の孤独』のなかで、死刑を宣告された男がアウレリアーノ＝ブエンディアーにこう言うところがあるんだよ。「ただ気にかかるのは、軍人を憎みすぎたために、彼らをあまり激しく攻撃したため、そして彼らのことを考えすぎたために、連中とまったく同じ人間になってしまったということなんだ。」そして、こう結ぶんだ。「この調子でいくと、あんたは、

7) Gabriel García Márquez: *El olor de la guayaba, conversación con P.A. Mendoza*, p. 105; Barcelona, Editorial Bruguera, 1982.

わが国の歴史はじまって以来の横暴かつ残忍な独裁者になるだろう。』)

Octavio Paz は、アメリカとフランスを例にとり、この両国には知的伝統があったので、それぞれ革命を通して近代国家に生まれかわることができたが、ラテンアメリカにはその伝統がなかったために、独立革命を成功させはしたものの、“la modernidad política, social y económica.”⁽⁸⁾ (政治的、社会的、経済的近代化)を達成することができなかったと述べている。この一文やレオポルド・セアの “The Hispano American, trained to obey, did not know what to do with liberty when he got his independence, and he surrendered to chaos.”⁽⁹⁾ (服従することに慣れたイスマノアメリカの人々は、独立はしたものの、自由をどう扱ってよいか分からず、混沌に屈服してしまった。)という言葉を考え合わせると、革命だけでは新しい国家が生まれてはこないのだと教えられる思いがする。ここでパスに戻れば、彼はさらにつづけてこう述べている。

“Durante más de un siglo América Latina ha vivido entre el desorden y la tiranía, la violencia anárquica y el despotismo. Se ha querido explicar la persistencia de estos males por la ausencia de las clases sociales y de las estructuras económicas que hicieron posible la democracia en Europa y en los Estados Unidos. Es cierto: hemos carecido de burguesías realmente modernas, la clase media ha sido débil y poco numerosa, el proletariado es reciente. Pero la democracia no es simplemente el resultado de las condiciones sociales y económicas inherentes al capitalismo y a la revolución industrial. Castoriadis ha mostrado que la democracia es una verdadera *creación* política, es decir, un conjunto de ideas, instituciones y prácticas que constituyen una *invención* colectiva. La democracia ha sido inventada dos veces,

(8) Octavio Paz: *Tiempo nublado*, p. 168; Barcelona, Editorial Seix Barral, 1983.

(9) *The Latin-American Mind*, p. 56.

una en Grecia y otra en Occidente. En ambos casos ha nacido de la conjunción entre las teorías e ideas de varias generaciones y las acciones de distintos grupos y clases, como la bruguesía, el proletariado y otros segmentos sociales. La democracia no es una superestructura: es una creación popular. Además, es la condición, el fundamento de la civilización moderna. De ahí que, entre las causas sociales y económicas que se citan para explicar los fracasos de las democracias latinoamericanas, sea necesario añadir aquella a la que me he referido más arriba: la falta de una corriente intelectual crítica y moderna. No hay que olvidar, por último, la inercia y la pasividad, esa enorme masa de opiniones, hábitos, creencias, rutinas, convicciones, ideas heredadas y usos que forman la tradición de los pueblos.”⁽¹⁰⁾ (一世紀以上ものあいだ、ラテンアメリカは無秩序と暴政、無政府的暴力と独裁制のあいだを揺れうごいてきた。このような悪がいつまでも続くのは、ヨーロッパとアメリカ合衆国において民主主義を可能にしたさまざまな社会階層と経済構造が存在しないせいであるという説明がなされてきた。たしかにそのとおりである。われわれには真の意味での近代的なブルジョワジーが欠けており、中産階級はいまだ弱く、数もごく少数であり、プロレタリアートも誕生したばかりである。だが、民主主義というのは、単に資本主義と産業革命に固有の社会的、経済的条件から生まれてきた結果ではない。カストリアディスは、民主主義が真の政治的創造物であることを証明した。すなわち、それはさまざまな理念や制度、実践の集合体にほかならず、その意味で集団的な創造物なのである。民主主義は、ギリシャと西欧において二度作りだされた。いずれの場合も、さまざまな理論や理念が何世紀にもわたってうけつがれ、さらにブルジョワジーやプロレタリアート、その他の社会の構成員など多様なグループや階級が活動を

(10) Tiempo nublado, p. 170.

行ってきたが、それらがひとつになったところから民主主義が生まれてきたのである。民主主義というのは上部構造ではない、それは民衆の作りだしたものである。加えて、それは近代文明の条件、基礎である。従ってここではラテンアメリカの民主主義が失敗した理由としてあげられる社会的、経済的原因のほかに、先にわたしが触れたもの、すなわち、近代的な批判精神を備えた知的潮流の欠如をつけ加えておかなければならない。最後に、惰性と受動性、つまりラテンアメリカ諸国の伝統を作りあげているさまざまな意見、習癖、信念、慣例、確信、受け継がれてきた考え、習わしなどのあのとほうなく大きな集積を忘れてはならない。

以上にのべてきたことから明らかなように、ラテンアメリカに独裁制が生まれてきた要因はじつにさまざまであり、ひと言で要約することはできないが、これはつまりそれほど複雑に絡みあった状況のなかから生まれてきたということである。パス、ガルシージャ＝マルケス、あるいはハルガルテンの「前世紀後半の時期以来、個々の暴政は、武力解放期の直後に比べて再び長期化し一層精力的なものになった。今世紀になって、いくつかのラアン・アメリカの国では民主制が実力者の支配を背後に押しやってしまったが、全体としては独裁制が依然として政治生活の支配的な形態である。」⁽¹¹⁾という言葉を思い返せば、独裁制はいまなおさまざまに姿形を変えて生きつづけていることに思いあたるだろうし、その文脈に即して考えれば、冒頭にあげたオブレゴンの宣言も驚くにはあたらないはずである。

* * *

以上に見てきたように、独裁制はラテンアメリカ諸国のうちに深く根をおろしており、現在もなおさまざまに形をかえて生きつづけている。P. A. メンドーサから、近年独裁者に対するラテンアメリカの作家の関心が急激に高まってきたようだが、その原因はどこにあるのだろうかと尋ねられたガルシージャ＝マルケスは次のように答えている。

(11) G.W.F. ハルガルテン『独裁者』p. 71. 岩波書店、昭和42年。

“—No creo que sea un interés repentino. El tema ha sido una constante de la literatura latinoamericana desde sus orígenes, y supongo que lo seguirá siendo. Es comprensible, pues el dictador es el único personaje mitológico que ha producido la América Latina, y su ciclo histórico está lejos de ser concluido.”⁽¹²⁾(急激に関心が高まったとは思えないな。このテーマは、その起源からラテンアメリカ文学の常数だったんだ。独裁者は、ラテンアメリカが生み出した唯一の神話的人物なのだから、それも当然のことだがね。それに、その歴史的サイクルもまだ完結してはいないんだ。)

この一節からも明らかなように、ラテンアメリカ諸国にはまだ独裁者を生み出す素地が根強く残っている。また、ここでガルシア＝マルケスが独裁者は起源からラテンアメリカ文学の常数であったと語っているように、独立以後の文学に目を向けても、独裁者、あるいは独裁制下に生きる人々の姿を描いた作品が数多く生みだされている。Julio Calviño Iglesiasによれば、1838年に出版されたエステバン・エチェバリアの“El matadero”を嚆矢として、1981年までに94冊もの独裁者、もしくは独裁制をテーマにした小説が書かれてきたとのことだが、現時点ではおそらくその数は優に100冊を越えることだろう。⁽¹³⁾

イグレスィアスの表を見ると、独裁者自身を主人公にした作品が以外に少ないことがわかる。現代ラテンアメリカ文学を見渡してみても、その数はごくわずかで、傑作と呼ばれる作品となると数えるほどしかない。現代文学における独裁者小説の傑作といえ、誰もがまっさきにMiguel Angel Asturiasの“El señor presidente”(1946)を思い浮かべるだろうが、ほかにもAlejo Carpentierの“El recurso del método”(1974)やAugusto Roa Bastosの“Yo el Supremo”(1974)、あるいは

(12) El olor de la guayaba, p. 125.

(13) Julio Calviño Iglesias: La novela del dictador en Hispanoamérica, p. 12-22; Madrid, Ediciones Cultura Hispánica, 1985.

Gabriel García Márquez の “El otoño del patriarca” (1975) (『族長の秋』) といった作品がある。なかでも、ガルシーア = マルケスの『族長の秋』は、作者自身が、ベネズエラの独裁者 Juan Vicente Gómez から着想を得たことはたしかだが、“Mi intención fue siempre la de hacer una síntesis de todos los dictadores latinoamericanos...” (ほくはラテンアメリカのすべての独裁者を総合してみたいとつねづね考えていたんだ。) のべているように、神話的、祖型的な独裁者像を描きだそうと試みている点が注目される。

1967年、つまり『族長の秋』が完成する八年前に行った Rosa Castro との対談の中でガルシーア = マルケスは次のようにのべている。

“Es decir: mi dictador, que es el general Nicanor Alvarado, ha llegado a tener un poder tan descomunal que ya ni siquiera manda. Ha llegado a ser tan poderoso que está completamente solo y completamente sordo, en un palacio lleno de jaulas de canarios, en cuyos salones se pasean las vacas. El dictador se vuelve loco por una niña de dieciséis años, a la que ha coronado reina de la belleza y está tan desesperado de amor, que manda asesinar a tres mil presos políticos en una noche... Es una visión poética del mito latinoamericano del dictador.”⁽¹⁴⁾ (つまり、わたしの独裁者、ニカノール・アルバラード将軍は自分の手に負えないほど巨大な権力を手に入れてしまったのです。とほうもない権力者になってしまったために、いまではカナリアの鳥籠がいっぱいある宮殿にたった一人で住み、耳はまったく聞こえないのです。そして、その宮殿の客間を牛が歩きまわっています。この独裁者が、美人コンテストの女王に選ばれた十六歳の女の子に王冠をかぶせてやったのですが、その子にすっかりのぼせあ

(14) El olor de la guayaba, p. 119.

(15) Michael Palencia-Roth: Gabriel García Márquez, p. 171; Madrid, Editorial Gredos, 1983.

がり、恋にくるってしまいます。そして、ひと晩のうちに、三千人の政治犯を殺すように命じるのです……独裁者にまつわるラテンアメリカ的な神話の詩的ヴィジョンなんですよ、これは。)

『族長の秋』と細部は多少くいちがっているが、おおまかな点はほぼここにのべられているとおりにだから、作品のアウトラインはこの時点ですでにできあがっていたと言ってもよいだろう。この引用文で注意したいのは、最後に出てくる神話に関する言及である。ミルチャ・エリアーデによれば、⁽¹⁶⁾神話とは宇宙の創造や死の起源など、原初の時、《始め》の神話的時に起こったできごとを物語る神聖な歴史であり、髭面の男でさえ襟を正して耳を傾けたとのことだが、この神話がやがて伝説や民話、あるいは叙事詩となって広まっていったことは、柳田国男も指摘しているとおりである。⁽¹⁷⁾ガルシア＝マルケスがここで神話という語を用いているのは、独裁者を超越的な存在とみなしたうえで、この人物を小説化しようとしたことを意味しているとみてよい。

ガルシア＝マルケスは、『族長の秋』を書いたあと、ある対談の中でラテンアメリカの独裁者についてつぎのようにのべている。

“Mi experiencia de escritor más difícil fue la preparación de *El otoño del patriarca*. Durante casi diez años leí todo lo que me fue posible sobre los dictadores de América Latina, y en especial del Caribe, con el propósito de que el libro que pensaba escribir se pareciera lo menos posible a la realidad. Cada paso era una desilusión. La intuición de Juan Vicente Gómez era mucho más penetrante que una verdadera facultad adivinatoria. El doctor Duvalier, en Haití, había hecho exterminar los perros negro en el país, porque uno de sus enemigos, tratando de escapar a la persecución del tirano, se había escabullido de su condición humana y se había convertido en perro

(16) ミルチャ・エリアーデ『神話と現実』（中村恭子訳、せりか書房、1974年を参照）。

(17) 柳田国男『物語と語り物』、p. 24. 角川書店、昭和50年。

negro. El doctor Francia, cuyo prestigio de filósofo era tan extenso que mereció un estudio de Carlyle, cerró a la república del Paraguay como si fuera una casa, y sólo dejó abierta una ventana para que entrara el correo. Nuestro Antonio López de Santana enterró su propia pierna en funerales espléndidos. La mano cortada de Lope de Aguirre navegó río abajo durante varios días, y quienes la veían pasar se estremecían de horror, pensando que aun en aquel estado aquella mano asesina podía blandir un puñal. Anastasio Somoza García, padre del actual, tenía en el patio de su casa un jardín zoológico con jaulas de dos compartimentos: en uno estaban encerradas las fieras, y en el otro, separado apenas por una reja de hierro, estaban sus enemigos políticos. Maximiliano Hernández Martínez, el dictador teósofo de El Salvador, hizo forrar con papel rojo todo el alumbrado público del país para combatir una epidemia de sarampión, y había inventado un péndulo que ponía sobre los alimentos antes de comer, para averiguar si no estaban envenenados...

En síntesis, los escritores de América Latina y el Caribe tenemos que reconocer, con la mano en el corazón, que la realidad es mejor escritor que nosotros. Nuestro destino, y tal vez nuestra gloria, es tratar de imitarla con humildad, y lo mejor que nos sea posible.⁽¹⁸⁾ 『族長の秋』を書くまでの準備期間が、作家になってからいちばんきつい経験だったですね。約十年間、ラテンアメリカ、とりわけカリブの独裁者に関する資料を可能なかぎり読みあさったのですが、そこには自分が書こうと考えている本をできるだけ現実からかけ離れたものにしたという意図がはたらいっていました。けれども、読みすすむうちにだんだん失望してゆきました。というのも、

(18) Gabriel García Márquez, p. 173-174.

真の預言能力よりもファン・ピセンテ・ゴメスの直感のほうがはるかに優れていたのです。ハイチのデュヴァリエ博士は、自分の敵の一人が独裁者の追跡の手を逃れるために、人間の姿を捨てて黒犬に変身したというので、国中の黒犬を一頭残らず殺させています。カーライルが研究の対象に選んだほど哲学者として著名で、ひろく知られていたフランシア博士は、まるで一軒の家のようにパラグアイ共和国の門戸をぴしゃりと閉じてしまい、郵便物の入る窓だけを開けておいたのです。われわれのアントニオ・ロペス・デ・サンタナは壮麗な葬儀をおこなって自分の脚を埋葬しています。ローペ・デ・アギーレの切りおとされた手は何日間も川を流れ下っていったのですが、その手を見た人達は、切りおとされていても、あの人殺しの手はまだ短剣を握りしめることができるのではないだろうかと考えて、恐ろしさに身を震わせました。現大統領の父にあたるアナスタシオ・ソモーサ・ガルシーアの家の中庭には、動物園があって、そこには真中に仕切りのある檻が並んでいます。その一方には猛獣が閉じこめており、鉄格子で仕切られただけのもう一方の側には彼の政敵が閉じこめられていたのです。エル・サルパドールの、神権主義者の独裁者マクシミリアーノ・エルナンデス・マルティネスは、伝染病のハシカが蔓延するのを防ごうとして、国中の屋外灯に赤い紙を貼りつけるように命じました。彼はまた、食べ物に毒が混ぜられていないかどうか調べるために、食事の前にその上でゆらす振り子を発明しています……。

要するに、ラテンアメリカとカリブの作家であるわれわれは、胸に手を当てて、現実はいわれわれよりも優れた作家であるということを認めなければなりません。われわれの運命、それにまたおそらくはわれわれの栄光というのは、現実を謙虚に、しかもできるかぎりうまく模倣しようと努めることにほかなりません。

ガルシーア＝マルケスは、できるだけ現実からかけ離れたものにしようと思って、独裁者に関する文献を読みあさったが、読めば読むほど失望を感じたとのべている。これはつまり、彼が予測していたよりも実在の独裁者の方が、はる

かに人間離れした、超人的な存在であり、その行動も並みはずれたものであったということにほかならない。彼が、独裁者はラテンアメリカが生みだした唯一の神話的人物である、とのべている理由もまさしくそこにある。ただ、こうした人物を小説化するのとはなみ大抵のことではない。着想を得てから完成までに十七年の歳月を要し、筆をとって書きはじめたものの、途中で二度にわたって挫折したというのも、様々な独裁者を総合した像、つまり典型的、祖型的な独裁者像を小説のなかに描きだすことがいかに困難であったかを物語っている。これが日常的な世界に生きる人物なら、小説の中の時間も日常的なものであってよいが、『族長の秋』に登場する独裁者が神話的な人物である以上、彼をとりまく時間も当然通常とはちがったものにならざるを得ない。その厄介な問題を片付けたいうえで、なおかつ信じがたいエピソードを語ってゆかなければならないのである。

ガルシージャ＝マルケスは、小説を書く時、まず最初に思い浮かぶのはアイデアではなくイメージであり、『族長の秋』の場合は、誰もいない宮殿に信じられないほど年老いた独裁者がひとりて暮らしており、その宮殿の中を牛が歩きまわっているというものであったとのべている。試みに、『族長の秋』をひもといてみると、たしかに陰気な大統領府のなかを牛がづうづうしくうろつき回っているという描写が出てくるが、そこに至るまでの記述がまことに興味深い。

“Durante el fin de semana los gallinazos se metieron por los balcones de la casa presidencial, destrozaron a picotazos las mallas de alambre de las ventanas y removieron con sus alas el tiempo estancado en el interior, y en la madrugada del lunes la ciudad despertó de su letargo de siglos con una tibia y tierna brisa de muerto grande y de podrida grandeza. Sólo entonces nos atrevimos a entrar sin embestir los carcomidos muros de piedra fortificada, como querían los más resueltos, ni desquiciar con yuntas de bueyes la entrada principal, como otros proponían, pues bastó con que alguien los empujara

para que cedieran en sus goznes los portones blindados que en los tiempos heroicos de la casa habían resistido a las lombardas de William Dampier. Fue como penetrar en el ámbito de otra época, porque el aire era más tenue en los pozos de escombros de la vasta guarida del poder, y el silencio era más antiguo, y las cosas eran arduamente visibles en la luz decrépita.”⁽¹⁹⁾ (週末に禿鷹^{ほげたか}どもが大統領府のバルコニーに押しかけて、窓という窓の金網をくちばして食いやぶり、内部に淀^{よど}んでいた空気を翼でひっ搔^かき回したおかげで、全市民は月曜日^{えいよう}の朝、図体の大きな死びとと朽ち果てた柴燿^{えいよう}の腐臭を運ぶ、生暖かい、穏やかな風によって、何百年にもわたる惰眠から目覚めた。このとき初めて、われわれは勇気を奮い起こしてそこへ押しいったのだが、しかしそのためには、やたらと威勢のいい連中がけしかけたように、あちこち崩れかけた石積みの塀を破ることも、またほかの連中が提案したように、何頭もの牛を使って正門を引き倒す必要もなかった。何者かが軽く押しただけで、大統領府のいわば英雄時代には、ウィリアム・ダンピアの白袍^{きゆうぼう}にもよく耐えた鉄の扉^{ちようつがい}の蝶番^{てつぱん}があっさりはずれたのである。まるで、べつの時代に潜りこんだような感じだった。だだっ広い権力の巢窟^{そうくつ}のがらくたの谷間に漂う空気が思いのほか稀薄だったからだ。静寂もはるかに由緒ありげで、そこらの器具もしおたれた光のなかで辛うじて見えるという有様だったからだ。)

ここで用いられている定動詞“atrevimos”と“vimos”に目をむけると、この主語は言うまでもなく一人称複数形の《われわれ》である。そしてこの《われわれ》が独裁制のもとで生きる民衆を差していることは、あらためて指摘するまでもないだろうし、読者もまた《われわれ》とともに、朽ち果てた大統領府に踏みこんでゆくことになる。こうした人称のたくみな使用によ

(19) Gabriel García Márquez: El otoño del patriarca, p.5: Barcelona, Plaza & Janes, 1975.(なお、訳文はガルシア・マルケス『族長の秋』(鼓直訳、集英社、1983年)を使わせていただいた。)

て独裁者の像をあざやかに描きだした作品に開高健の『流亡記』があるが、この作品でもやはり《われわれ》という代名詞を用いることで、作者は秦の始皇帝の圧政下に生きる民衆の世界へ読者をひきこんでゆく。ガルシーア＝マルケスはしかし、開高健のように、帳の奥の闇の中から苛借ない支配をおこなう独裁者像を影絵のように浮かびあがらせるのではなく、真正面からそれを描きだそうとしている。しかし、先に引用したガルシーア＝マルケスの言葉にもあったように、ラテンアメリカの独裁者は通常の間人をはるかに越えた存在、つまり、神話的、英雄的な存在であり、したがってこのような人物を描くには通常の小説的手法や時間処理ではとても間に合わない。神話的性格を備えた超越者の生きる世界は、当然のことながら日常的な世界とは次元も時間も異にしており、読者をそこへ引きこむには、異界に導き入れるための通過儀礼が必要となる。かくして、読者は《われわれ》とともに、門を通して“en el ámbito de otra época”の中、つまり異界へと入ってゆくのである。そのなかに一歩踏みこめば、もはやなにが起ころうとも驚くことはない。このような通過儀礼を終えた読者は、そのあととめどなく語りつがれるすさまじいとしか形容のしようのない数知れぬ挿話の奔流に押し流され、圧倒されることだろう。そして、巻を閉じたあと、読者は言いようのない悲しみを、それもあの独裁者に対する悲しみをおぼえるだろう。あれほどすさまじい虐殺をおこない、数知れぬ醜行、愚行をくりかえしたおぞましい人物に対して、なぜ憐愍の情が湧いてくるのか不思議に思えるが、その点についてはあらためて考えることにして、ひとまずは作品の結構に目をむけることにしよう。

章分けされていないが、この作品は全体が六つの部分に分かたれており、それぞれの部分の出だしはすべて独裁者の死にまつわる描写で始まっている。そして、そのそれぞれにおいて無数の挿話が語りつがれてゆく。『族長の秋』を取りあげた José Miguel Oviedo は、この作品は厩大な断片から成っていて、始まりもなければ、終わりもないような印象をうける。つまり、スト

ーリーの展開も発展もないこの作品では、いっさいが永遠の現在のなかで生起しているように思われるとのべたあと、“El libro es *sólo* el fin del dictador, y lo más insólito es que ese fin se proponga como algo cíclico y a la vez ilusorio: parece ocurrir, puede haber ocurrido varias veces.”⁽²⁰⁾（この作品は独裁者の最期を物語っているだけである。そして、なによりも奇妙なことは、その最期が、なにか循環すると同時に、人を惑わせるものとして提起されていることである。つまり、これは何度も起こるように見え、過去においても何度か起りえたように思えるのである。）と記している。オビエドが指摘しているように、『族長の秋』では物語小説で用いられるクロノジカルな時間がまったく無視されている。その中を流れているのは、循環する円環的な時間なのである。ガルシア＝マルケスもやはり、Ernesto González Bermejo との対談の中で、概念としての時間はまったく気にならなかったのですかと尋ねられて、『族長の秋』の非歴史的な記述に触れたあと、“Por eso verás como estoy tratando el problema del tiempo. A mí me importa que todo esto haya sido historia en un momento; ahora, el orden cronológico no me importa en absoluto.”⁽²¹⁾（わたしが時間の問題をどう扱っているかは、以上の説明で分かっただけだと思います。わたしとしてはこの物語を瞬間における歴史にしたかったのです。いまは、クロノジカルな順序はすこしも気になりません。）

《瞬間における歴史》とは、奇妙な表現だが、要するにこれはクロノジカルな時間、歴史的時間の否定にほかならない。作品の冒頭で、朽ち果てた大統領府とそこで死体となって転がっている独裁者を描きだした作者は、残りの断章でもその出だしのところで必ず独裁者の死に関する描写をおこない、さらに作品の末尾をつぎのように結んでいる。

(20) Gabriel García Márquez, edición de Peter G. Earle, p. 173; Madrid, Taurus Ediciones, S. A. 1982.

(21) García Márquez habla de García Márquez, recopilación y prólogo de Alfonso Rentería Mantilla, p. 58; Bogotá, Editoriales Itda.

“...nosotros sabíamos quiénes éramos mientras él se quedó sin saberlo para siempre con el dulce silbido de su potra de muerto viejo tronchado de raíz por trancazo de la muerte, volando entre el rumor oscuro de las últimas hojas heladas de su otoño hacia la patria de tinieblas de la verdad del olvido, agarrado de miedo a los trapos de hilachas podridas del balandrán de la muerte y ajeno a los clamores de las muchedumbres frenéticas que se echaban a las calles o cantando los hinmos de júbilo de la noticia, jubilosa de su muerte y ajeno para siempre jamás a las músicas de la liberación y los cohetes de gozo y las campanas de gloria que anunciaron al mundo la buena nueva de que el tiempo incontable de la eternidad había por fin terminado.”⁽²²⁾(われわれは自分が何者であるかを心得ていたが、彼は、くたばり損ないの老いぼれめいたヘルニアの甘い声に瞞^{だま}されて、ついにそれを知ることがなかった。知らぬままに、秋も終わりの冷たく凍てた枯葉の陰気な音を聞きながら、忘却という真実が支配^{とこやみ}する常闇^{とこやみ}の国へと飛び立っていった。恐怖のあまり、死神の糸のほつれた衣の裾^{すそ}にしがみつきながらである。彼が死んだという喜ばしいニュースを伝え聞いて表へ飛びだし、喜びの歌をうたう熱狂的な群衆の声を聞かずにである。解放を祝う音楽や、賑やかな爆竹の音や、楽しげな鐘の音などが、永遠と呼ばれる無窮の時間がやっと終わったという吉報を世界じゅうに告げた、それも聞かずにである。)

この一文を読み終えた読者は、何度も堂々めぐりしたすえに辿り着いた出口がじつは入り口と同じところだったという奇妙な思いにとらえられ、まるで円環の時間の中を旅してきたような気持ちに襲われるだろう。オビエドが、この作品には発展も展開もないとのべた理由もそこにある。つまり、ガルシエ＝マルケスはクロノロジカルな時間、歴史的な時間をつき崩し、破壊するために

(22) El otoño del patriarca, p. 271.(訳文は鼓直氏のを引用させていただいた。)

あのような結構を作品のなかにもちこんだのだが、そうした工夫は文体面にも及んでいる。P. A. メンドーサは、『族長の秋』を取りあげて、この作品では時間をはじめ、地理、歴史も自在に変容させられており、それはシンタクスの面にまで及んでいる。文体に目をむけると、ピリオドやセミコロンのない長文が延々とつづき、その中にさまざまな語り手の視点が織りこまれているが、どうしてあのような文体を用いたのかと、ガルシア＝マルケスに尋ねている。彼はその質問に対してつぎのように答えている。

“Imaginate el libro con una estructura lineal: sería infinito y más aburrido de lo que es. Su estructura en espiral, en cambio, permite comprimir el tiempo, y contar muchas más cosas como metidas en una cápsula. El monólogo múltiple, por otra parte, permite que intervinieran numerosas voces sin identificarse... De todos mis libros éste es el más experimental, y el que más me interesa como aventura poética.”⁽²³⁾ (あの作品でリネアルな構造を用いたりしたら、それこそ永遠に終わりのこない退屈きわまりないものになっているよ。そうでなく、螺旋的な構造を用いたから、時間を圧縮することができたのだし、まるでカプセルに詰めこむように、沢山のことを語る事が可能になっているんだ。それに、多元的なモノローグを用いたけど、あのおかげで、誰がしゃべっているのかははっきりさせないで、数多くの声を織りこむことができたんだ.....ぼくの作品の中では、あれがいちばん実験的で、詩的冒険としても興味深いものなんだ。)

つまり、ガルシア＝マルケスは無限につづく果てしない挿話を、そして時間を切り詰め、凝集させるために、あのような作品構成と文体を創造したのである。その意図が、《瞬間における歴史》を語ろうとするところにあることは、改めて指摘するまでもないだろう。それにしても、《瞬間における歴史》とは、まことに奇妙な表現だが、この言葉は、M. エリアーデに即して考えると分か

(23) El olor de la guayaba, 122.

りやすいものになる。エリアーデは、『永遠回帰の神話』の中で、古代文明人は歴史を扱うことが苦手で、歴史的な事件を典型的な神話の形で残そうとする傾向があった。かれら古代文明人は、民衆叙事詩において歴史的原型をたえず神話化してゆき、英雄を古代神話の英雄のイメージに従って作りだしてゆくとして、「叙事詩にうたわれている人物の歴史的な性格は問題ではない。彼等の歴史性はこの神話化の浸蝕作用に長く抵抗し得ないのである。歴史的な事件そのものは重要であるが、民衆の記憶にはとどまらず、またその追憶は特殊の歴史的な事件を神話的モデルに密接に近づけるのでなければ、詩人の空想を燃え立たせないのである。」と指摘している。さらに、そのあとのところで、「集合体の記憶は非歴史的である。」とのべているが、以上のエリアーデの言葉にしたがえば、⁽²⁴⁾ガルシーア＝マルケスがクロノロジカルな時間を、歴史性の作品から払拭して、老独裁者の姿と彼にまつわる驚異にみちた無数の挿話を語っているのは、彼が民衆叙事詩の、あるいは民話、伝説の語り手と同じ位置に身を置いているからにほかならない。P. A. メンドーサとの対談で彼はつぎのように語っているが、その言葉がなによりもよく以上にのべたことを証明している。

“—Quizás, como te lo dije ya, la pista me la dieron los relatos de mi abuela. Para ella los mitos, las leyendas, las creencias de la gente, formaban parte, y de manera muy natural, de su vida cotidiana. Pensando en ella, me di cuenta de pronto que no estaba inventando nada, sino simplemente captando y refiriendo un mundo de presagios, de terapias, de premoniciones, de supersticiones, si tú quieres, que era muy nuestro, muy latinoamericano.”⁽²⁵⁾（たぶん、きみにはもう言ったと思うけど、ぼくが現在のような作品を書くようになったのも、もとはと言えば祖母が語って聞かせてくれた物語のせいなんだ。祖母にとっては、民衆の神話や伝説、信仰といったものが日常生活の一部を形成していたんだよ、それもごく自

(24) M. エリアーデ、『永遠回帰の神話』, p. 48-64, 堀一郎訳, 未来社, 1983年。

(25) El olor de la guayaba, p. 84.

然な形でね。祖母のことを思い返して、ふと気がついたんだけど、ぼくはなにも創造してはいなかったんだ、予兆、民間療法、前兆、迷信、なんでもいれ要するにそういうものでできあがった世界をとらえて、語りつづけてきただけなんだ。そして、こういうものが、われわれの、つまりいかにもラテンアメリカ的な世界なんだ。)

ガルシア＝マルケスがここで謙虚に、しかも正直に告白しているように、彼は祖母を通して、ラテンアメリカの、とりわけカリブの民衆のなかに保たれているきわめて古い型の物語的な伝統を受け継ぎ、それを自分のものにしたのである。彼が現代小説の新しい手法、技法をどれほど用いようとも、その作品の根底にあるのが、神話的、祖型的な世界と人物の創造であることは先の引用からもあきらかだろう。

先進国といわれる国々の小説が死に瀕し、神経症的な、もしくは分裂病的な作品しか生みだし得ない現状を思いながら、ガルシア＝マルケスの作品、とりわけ『族長の秋』を読むとあらためて小説というのは物語的伝統の泉から生命を得ているのだと教えられる思いがする。